

楽器の値打ち

其の一



「いやいや、あの茶碗には
値打ちはない。なあ？」

ただ、あの茶碗に近衛殿
下が御短冊を添えてくだ
すつて、畏れ多くも禁廷
様が御色紙、そして『はて
な』という御名をくだすつ
た。それがために千両とい
う金になった」

〔茶金〕志ん朝の落語

ちくま文庫

今年5月、ニューヨークのオークションで、ストラ
ディヴァリ作の「ハンマー」という名前のバイオリ
ンが、日本円で約3億9000万円で落札されました。
楽器としての過去最高額を更新したそうです。オー
ルドイタリアンバイオリンの価格の高騰は、とどま
るところを知らないようです。

そのことの良し悪しはさておき、楽器の値打ちとは
いったい何なのか、今回はそんな問題を考えてみた
いと思います。

冒頭に引用した文章は、故古今亭志ん朝演ずる古典落語「茶金」の一節です。茶金とは、茶道具を扱う京都の骨董屋、茶屋金兵衛のこと。稀代の目利きで、たいがいの品物は手にとって見ることもないが、ひとたび茶金が手にとって、首の一つでも傾げようものなら、それだけで百両の値打ちがあるとされるほどの人だったそうです。

この人がある日、清水寺近くの掛け茶屋でお茶を飲んでいたら、手にした茶碗を幾度もしげしげと見ては首を傾げて考え込んでいる。

これをたまたま見ていたのが借金を作って江戸から逃げてきている八五郎という道楽者。八五郎は、しめた、あの茶金さんが首を傾げた茶碗なら高価なものに相違ないと茶金が店を出るやいなやお茶屋に駆け込み、しぶる主人を言いくるめて無理矢理茶碗を買い取ってしまう。

さて三日後、八五郎は首尾良く手に入れた貴重な茶碗を買い取って貰おうと、勇んで茶屋金兵衛の店を訪れる。ところが品物を見た茶金に、清水焼の数茶碗で一文の値打ちもないと笑いとばされてしまう。納得いかない八五郎は、だって茶金の旦那、あんた三日前にこの茶碗をつくづくと眺めては首を傾げていたじゃないか。

すると、茶金は、ああ、あの茶碗ですか、あれはどこからどうみてもヒビもなければ傷もないのに水が漏るので、はて不思議だなあ、とこう首を傾げてい

たのです。

がっかりする八五郎を哀れんだ茶金は、十両をわたして茶碗を引き取る……。

と、ここまでなら欲をかいたばかりに、とんだしくじりをしたというだけの話なのですが、これから噺は思いがけない展開を見せます。

近衛殿下の茶席に招待された茶金が、話のついでにこの茶碗を話題にすると、殿下がご興味を示され、この茶碗をご覧にされることになった。すると話は更に時の帝のお耳にとまり、なんと茶碗が御所に参上することに。不思議な茶碗に感心した帝が、色紙に歌をお書きになり、茶碗の箱に『はてな』と揮毫されたので、さあ大変。あっという間に話が広まり、金持ちが茶金の店に続々とやってきて、ついには千両でこの茶碗が売れてしまう……。

そして冒頭に引いたせりふへとつながるわけです。この後、八五郎は義理堅い茶金から三百両という大金をもらい有頂天で江戸に帰るかと思ったら、数日後、また茶金の店を訪れ、今度は十万両になる掘り出し物を見つけてきたという。八五郎が持ってきたのは水瓶（みずがめ）の漏るやつ……。



以上が「茶金」という噺のあらすじなのですが、閑話休題。ストラディヴァリのバイオリンに話を戻しましょう。

少し前までバイオリニストの竹澤恭子さんに貸与されていたというこのバイオリンが優れた楽器であるのは間違いないでしょう。

また、ストラディヴァリのバイオリンが、バイオリニストにとって、想像力を喚起し、表現の幅を広げることができるかけがえのない楽器であるという話もよく分かります。しかし、冷静に常識で考えた場合、3億9000万円という金額は一挺のバイオリンに支払われる額としては桁外れのように思います。通常新作のバイオリンを購入する場合、もっとも高価なもので300万円程度です。純粹に音楽を奏するための道具としての楽器に支払われる金額としては、こんなところでしょう。

4億円近い金額は、明らかにその多くが道具としての楽器以外のなにものかに支払われていると言えるのではないのでしょうか。

では、その楽器以外のなにものかとは何か。

一言で言えば、それは「伝説」と言えるのではないのでしょうか。

二束三文の清水焼の数茶碗が、御所に参上し、帝に命名されたことで「伝説」の茶碗となった。

数茶碗とストラディヴァリを一緒にできないのは当然ですが、ともに「伝説」が「値打ち」を高めてい

る点では同じでしょう。

そして「伝説」ということとなると、もはや骨董の世界に片足を踏み込んだとも言えますが、そうになると真贋問題をはじめとして、様々な微妙な問題を孕み、一気に足下が覚束なくなります。足を踏み外さないうちに今回はこの辺で。

また次号でゆっくりと考えてみたいと思います。



光る

マエストロ

クレモナ留学記～冬を乗り切れ編～

午後7時半。夏時間が終わって時計を1時間戻したせいもあって、外はもうすっかり真っ暗。

「さて今日の作業は終わり。」

黄色いジャケットの前をしっかりと止めてマエストロも帰り支度。

「え、黄色!?!」

「歩いて帰るから、車から見えやすいようにね。」

そうここは北イタリア、冬には太陽の国イタリアとはほど遠く、霧に包まれて真っ白になるんです。しかもイタリア人の運転は・ ・日本の1.5倍ぐらいのスピードが出てるんじゃないかと思うぐらい、霧でも関係なくとばすので、そんな私も自転車の前後ろにライトをしっかりと付けて。



つい先日まで、日差しが強くて暑い暑いと、作業台の目の前すぐにある窓のシャッターを半分閉めて作業していたのが今ではいとおしい。長い冬の始まりです。

湿度の高いクレモナで、何百年も前から楽器作りが盛んなのはいまだに不思議。暖房を使い始める11月前は特に、洗濯物が4、5日乾かないことも。けれど寒くて湿度の高い外とは対照に、石造りの家の中はあったか。暖房がセントラルヒーティングになっていて、ボイラーで暖められた温水が管を通って家中に届く。キッチンにもトイレにも。この管は必ず各部屋の窓の下かそのすぐ近くに取り付けてあって、暖房の暖かい空気と窓近くの冷たい空気との間で対流が起きて部屋中が暖まる仕組み。



それでもクレモナは本来そんなに雪が降る気候ではないので(大分市と同じように降っても2・3cmがひと冬に1回ぐらい)、去年の30cmの大雪にはみんなパニックでした。

寒くて長いクレモナの冬をどう乗り切るか、それは簡単。たくさん作業をして体の中から暖まる。でもマエストロのように半袖でとまでは、なかなか長い道のりのようです。

Primo Pistoni(プリモ ピストーニ)

: 現代イタリアを代表するバイオリン製作家の一人。
以前、製作学校でも指導していたが、今は自身の製作に専念。日々、より良い楽器を追求し続けている。



DALLA BOTTEGA

ニコラウス・アーノンクールが指揮する、二つの演奏会に行ってきました。

ウィーンフィルによるモーツアルトとベートーヴェンの交響曲というプログラムと、古楽器オーケストラ、ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス によるモーツアルトのレクイエム。

ともに素晴らしい演奏会でした。特にモーツアルトのレクイエム！演奏終了後、しばらく拍手する気も起きないほどに圧倒されたのは久しぶりの経験です。

レクイエムは、通常個人的な生活と創作活動を切り離していたモーツアルトにおいては特異な作品であり、死に直面したモーツアルトの心の奥底における自己との対峙が表現されている。アーノンクールはそう解釈します。

まさにその通りの演奏であり、時も空間も飛び去り、ただモーツアルトの晩年の心情のみが舞台に繰り広げられた、そんな気さえしました。

今年 77 歳のアーノンクールは極めて元気に見えましたが、レクイエムの演奏のあとでは、さすがにコンサートマスターの椅子の背に掴まって喝采を受けていました。それだけ全身全霊を込めた演奏だったのでしょう。

彼の音楽に対する限りない情熱を思うと、頭の下がる思いです。



CD

モーツアルト レクイエム K.626

ニコラウス・アーノンクール

ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス

アーノルト・シェーンベルグ合唱団 他

BMG Japan